

ミレトスのアナクシマンドロス

—その断片 DK. 12 B1 について—

一

アナクシマンドロスは「第五八オリンピックア年紀の第二年 (547/6 B.C.) には六四歳であり、そしてまもなく歿した」と伝えられている。アナクシマンドロスの生きた紀元前六世紀イオニアのミレトスは自然哲学 (*φύσις φυσικός λόγος*) の誕生の地であり、知的・技術的革新の舞台であった。この市の人であり、タレスの弟子であったこの哲学者は、多方面にわたる非凡な才能によって、ミレトス市民のために貢献したのであった。かれは黒海沿岸のアポロニアへの植民遠征を指導し、最初に世界地図を制作し、また天球儀をも制作した^④、と伝えられている。またグノーモン「その影

が太陽の方向と高さを示す、いわゆる日時計の示影針」をバビロニア人から学んで、ギリシヤ人に伝えたのもかれの功績の一つである、と考えられている^⑤。このような業績の故に、当時ミレトスの市民たちはアナクシマンドロスの記念像を建立したのであろう。ミレトスでの発掘により発見された、上部の欠けた一彫像に、*Ἀν' ἀσκήνδρου* の文字が見られるが、この彫像はミレトスの市民に貢献するところ大であったこの哲学者の記念像としてのみ考えられるのである^⑥。

かれの技術的、实际的活動による貢献はかように大きかったが、しかし他面アナクシマンドロスは、その限りでは、タレスの仕事を継承し発展させたにすぎないとも考え

箕浦 恵了

られるであろう。かれがタレスを超え、その天才を發揮したのは、むしろかれの宇宙論的規模を持った哲学的思惟においてであった、と思われる。かれはその思惟を書物に書いた^⑧、と言われる。その文体は、現存する若干の断片的語句に関して、「やや詩的な言辞」と言われているけれども、しかしそれは従来のホメロスやヘシオドスの詩とは異った新しい表現形式のものであった。

アナクシマンドロスの名前は、かれの「忘れ得ぬ精神的相貌」(ヤスパース)によって、紀元前六世紀のイオニアにおいては畏敬の念をもって語られたであろう、と思われる。だがしかし、その後かれの名はまるで忘れ去られてしまったかのようで、その名が再び記録にあらわれたのはようやくアリストテレスやテオプラストスの時代になってからであった。

スイダスの記述によれば、アナクシマンドロスは「自然について書いた」と言われる。しかし、それはただちにかれが「自然について」という表題の書物を書いたということではないであろう。ディオゲネス・ラエルティオスの報告によれば、「かれはかれの学説の概要的論述を行っていたのであり、恐らくその論述にアテナイ人アポドロソスも偶々出会ったのであろう」、と言われている。もしその通

りだとすれば、報告されているアナクシマンドロスの書物は、かれの学説が詳述されているような、整った形の書物であったのではなく、これは始めからごく簡略な、学説の概要の如きものであったとも考えられるのである^⑨。また、その著作にアポドロソスも「偶々出会った」と語られていることからみれば、アポドロソスの時代「紀元前三世紀」には、アナクシマンドロスのこの手短な著作もすでに余程の稀覯本になっていたのではないかと思われる。或はむしろ、アナクシマンドロスやアナクシメネスの著作は、アリストテレスの時代にはすでに失われていたのであるが、これら二人のミレトスの哲学者たちの著作を探し求めて、その写本を発見したのであろう、とジゴン(Gigon, O.)の如く考えるべきかも知れない^⑩。しかしその写本は再び散佚してしまった。アリストテレスの注釈家シンプリキオス

「六世紀」やその他学説誌家の注意が再びアナクシマンドロスに向けられたときには、かれらの手許にアナクシマンドロスの書物はもはやなかった。シンプリキオスらの手許にあったのは、テオプラストスの『自然学者たちの諸教説』(Φυσικῶν δόξαι)であった。しかるにテオプラストスのこの書物もその後失われ、今日ではこれはただ断片的に

保存されているにすぎない。いま、わたくしたちがアナクシマンドロスに接しようとするとき、そのための主要な典拠となるシンプリキオスの書物は、このようにアナクシマンドロスの原著からはるかに隔った非直接的なものである。アナクシマンドロス研究の困難はまず第一にこの点にある、と言えよう。

二

シンプリキオスは『アリストテレスの自然学注釈』のなかで、テオプラストスを参照しつつ、アナクシマンドロスについて次の如く述べている。

「アナクシマンドロスは、……ト・アペイロンが有るものらの始めであり、^{アルケー}元素である、^{ストイキオン}と言った、かれはアルケーのこの名前を最初にもたらしで。で、かれは言っている、それ「アルケー」は水でもなくまたその他の元素と呼ばれているものらのうちの一つでもなく、むしろ別な限りのない自然であり、そのものからすべての天たちとそれらのうちにある宇宙らとが生成するのである、と、で、有るものらにとって生成がそれらからであるところのものら、そのものらへと正当

に従って「^{プロタ}正当にも」消滅もまた生成する「消滅する」、と、なぜならそのものらは時の定めに従って相互に不正の罰を受けまた償いをなすゆえ、とそういうふうやや詩的な言辞でそれらのものを語って。明らかに、かれは四つの元素の相互変化を觀察してそれらのうちのなにか或る一つのものをではなく、それらを超えた他の或るものを、^{ヒポタイシ}基体とすることを適切と考えたのである。そうしてかれは生成が行われるのは元素が変化するからではなく、永遠の運動によって、相対立するものらが分離するからであるとしている。この故にこの人をアリストテレスはアナクサゴラスの仲間配列したのであった」。

この文章のなかでシンプリキオスは、「そういうふうやや詩的な言辞でそれらのものを語って」、と言っている。そのことから、先の文中にはアナクシマンドロス自身の言葉がシンプリキオスによって引用されて、直接あらわれている、と考えられるであらう。ではそのうちどれだけの言葉がアナクシマンドロス自身に帰せられるであらうか。シンプリキオスの引用の仕方は自分の文章と他からの引用文との区別をはっきりさせていないので、先の文章のなかか

らアナクシマンドロス自身の言葉を、一つの残された断片として、選り出すことは必ずしも容易ではないのである。従ってその点に関する諸学者の見解はまだ充分な一致をみていないようである。ディールス並びにクランツのテキストにみられるアナクシマンドロスの断片第一(DK. 12B1)は諸家の見解のなかでは最も長い文章が選り出されているものであろう。その選り出された断片は次の通りである。

ἀγορῇ τῶν ὄντων τὸ ἀπείρου ἐξ οὗ θεῖ ἡ
 γένεσις ἐστὶ τοῖς οὐρα, καὶ τὴν σφωρόντι εἰς ταῦτα
 γίνεσθαι κατὰ τὸ γένος· διὸ οὐα γὰρ αὐτὰ ἀίτην καὶ
 τίαν ἀλλήλους τῆς αὐτέας κατὰ τὴν τοῦ χρόνου τάξιν.
 「ト・アペイロン「限りなきもの」は有るものらのアル
 ケー「始め」、……で、有るものらにとって生成がそれ
 らからであるところのものら、そのものらへと正当に
 従って消滅もまた生成する、なぜならそのものらは時
 のために従って相互に不正の罰を受けまた償いをなす
 ゆえ」。

右の断片をディールスは早い版では A 群 (testimonia) に置いて、アナクシマンドロス自身の言葉とするのにな

お躊躇を表明していたけれども、それを、da Wörtlichkeit zweifellos と脚注に記して、B 群(断片)に入れたのはクランツ(第五版)である。しかしそうだとしても、ἀγορῇ 以下を断片とするクランツの決定はディールスの見解に反して行われたものではなく、却ってディールスの意にそって行われた決定であると言ってよいであらう。なぜかという、ディールスは晩年の論考 *Anaximandros von Milet* 1923 のなかでそういう考えを次のように明らかにしているからである。

「ギリシャ文献のこの畏敬すべき古版本^{インクテペル}「アナクシマンドロスの『自然について』を指す」、そのなかからの若干の断片及び抜粋が現存しているのだが、それは次の如き記念碑的文章で始まっていた、即ち、万物の始めは無限なものである、という。その意義は二つ。一つには、始め(ἀγορῇ)という言葉は単に時間的始めを意味するだけではなく、またものの起源や本質をも意味しているのであり、従ってそれをわれわれは、ラテン語を用いる人々の訳語にならって、^{ブレンツ}原理と呼ぶのである。それゆえアナクシマンドロスは哲学を原理の学として扱えたのであった」。

また断片の ἐξ οὗ 以下 τάξιν までの文章については、「この哲学者の実際の言葉はほとんど不変のまま保存されて

来ているとわたしは思う^④、と述べ、デイルスは今日の断片集にみられるこの断章の訳語とはやや異った譌訳を示しているのである。従って、今日デイルス及び克蘭ツのテキストに見られるこの断片は、その訳語についてはフレンケル (Fränkel, H.) の研究を参照して改められたと思われる点があるけれども^⑤、しかしギリシャ語断片そのものは、デイルスの晩年の見解に基づいたものだと言つてよいであらう。

三

しかし *ἀρχή* の語の使用をアナクシマンドロスに帰することは正当であらうか。この語の最初の使用をかれに帰することによって、かれは哲学を原理の学 *Prinzipienlehre* と理解した、と結論することは果して許されるであらうか。アナクシマンドロスにおける *ἀρχή* の語の問題についてはバーネット (Burnet, J.) とイエーガー (Jaeger, W.) との相対立する見解があるので、まずその両者の見解を参照しつつ考察を進めたいと思う。

アナクシマンドロスの断片のなかに *ἀρχή* の語を入れるか否かは先に引用したシンプリキオスの文章のなかの次のような箇所の解釈によって左右されるであらう。

「アナクシマンドロスは、……ト・アペイロンが有るものらの始め (*ἀρχή*) であり元素である、と言つた、かれは始めのこの名前を最初にもたらして」 (*πρώτος τοῦτο τοῦ νοῦα κοίνας τῆς ἀρχῆς.*)

もし右の文章が、「アナクシマンドロスはアルケーという語を初めて導入した」、という意味に解され得るとすれば、この語は断片の一部となることが出来るであらう。そしてデイルス、克蘭ツの断片決定はその点正しいとされるであらう。だがバーネットはそういう読み方に異議をさしはさみ、右に挙げた文章「ギリシャ語の部分」の自然な意味は、*he being the first to introduce this name (τὸ πρῶτον) of the material cause.* であつて、この名前とはト・アペイロンのことでありアルケーを指すのではない、と考えたのであつた^⑥。そういう考えに対してイエーガーは、シンプリキオスのこの文章の意味は、しかし、どこまでも「アナクシマンドロスはアルケーという語を初めて導入した」ということである、と言ふ。ただし、元素 (*στοιχεῖα*) という語はペリパトス学派の用語であり、テオプラストスによつて、*ἀρχή* という語を質料の原因として理解されるよう限定するために、付け加えられたのである、とイエーガーは言う^⑦。だがしかし、バーネットやイエ

ーガーがそれぞれ自説を論証しながら挙げている古代の証言は決定的なものではない、と思われる。

(一) Hippolytos, *Refut.*, I, 6, 2: *oûtos mén ou̐n* (Anaximandros) *agōgēn kai̐ storgion eîphke tōu ōrtōu tō aretōu, hōtos tōvōma kalēas tēs agōgēs.* [γρ] この人はト・アペイロンが有るものらのアルケーであり元素であると言った、アルケーの名前を最初に呼んで。

もしバーネットの主張が正しいとするならば、ヒポリュトスのこの文章は *hōtos tōto tōvōma kalēas tēs agōgēs.* となっているべきであろう。しかしヒポリュトスは *tēs agōgēs* という属格を用いているのである。これはバーネット説には不利なエヴィデンスのように見える。バーネット説に対するイエーガーの反論は右の如くである。

この反論はマクダイアミド (McDiarmid) も言っているように、もしテオプラストスの原文に *koimōas* 「もたらして」という語ではなく、ヒポリュトスにおけると同様 *kalēas* 「呼んで、名づけて」の語が用いられていたとするならば、バーネット説への充分な反論となる。しかしテオプラストスの原典は失われているので、その限り反論はまだ充分な反証を持ったことにはならないであろう。他方テオプラストスの原文においても、シンプリキオスと同様

に、*koimōas* が用いられていたと考えてみる場合、問題は、そういう文章でテオプラストスが意味するところをヒポリュトスがどう解したかである。ヒポリュトスはその文章を、バーネットの読みとは異った意味で、読み、「アナクシマンドロスはアルケーという名を最初に用いた人であった」ということ以外の他の解釈の余地のない文章でそれを表現したのである、とイエーガーは言っているのである。^②

しかし他面、ヒポリュトスという人はシンプリキオスがテオプラストスを引用し得た程には直接的伝承に立っていないし、ヒポリュトスの用いた語 *kalēas* はいかにもペリパトス学派らしい語 *koimōas* からの corruption であると思われるし、それにまたヒポリュトスによって *tōto tōvōma* から *tōto* の削除が行われたということのほらが、その語が本来はなかったのに、アレクサンドロス (Alexandros of Aphrodisias) かまたはシンプリキオスによって書き加えられたということのほうよりも、いっそうありうることである、とバーネットは言っている。^③ バーネットはヒポリュトスの資料的価値を認めていない。^④ *tōto* がテオプラストスの原文にあった本当のものであるならば、*tōto tōvōma* は *tō aretōu* を指している、という

のがバーネットの主張である。しかしその点に関して、そうでなければならぬという文法的理由をバーネットは挙げておらず、バーネットは自分のほうがより自然な解釈であると言っているにすぎない、とイエーガーは批評している。

論議の双方を比較するとき、ヒポリュトスの証言はバーネット説に対する反証となる可能性はあるけれども、しかしこれはイエーガーの考える程決定的なものではありえないであろう。

(i) Simplikios, *Phys.*, p. 150, 23: *πρότος αὐτὸς (Anaximandros) ἀρχὴν νομίσας τὸ ὑποκείμενον*. [最初にかれ(アナクシマン드로ス)は自らの基体をアルケーと名づけた]。

シンプリキオスのこの文章は「アナクシマン드로スはアルケーの語を最初に使用した」ということを保証するかのように見える。しかしバーネットは、この文章の意味は *being the first to name the substratum of the opposites as the material cause*. ということであって、これは全然別なことを指している、^③ と言う。即ち、アナクシマン드로スはいわゆる対立的諸元素のうちのどれか一つを基体としたのではなくて、アルケーとして、そういう対立的諸

元素の基にあるものの名を初めて挙げたということを先のシンプリキオスの文章は意味しているのだ、とバーネットは言っているであろう。シンプリキオスが基体と言っているだけのものを、バーネットは *the substratum of the opposites* と解した点に、この理解のアクセントがあるのだと思われる。

これに対してイエーガーはおよそ次の如く反論している。シンプリキオスのこの文章の意味はウゼナーやディールスによって正しく理解されたように、*Er (Anaximandros) gab ihm (τὸ ὑποκείμενον) den Namen ἀρχή*. 即ち、バーネットが理解した如き意味、即ち *Anaximander nannte als den materiellen Grund das Substrat*. の意味ではない。*νομίσας* の語義は *den Namen geben* である、と。

イエーガーのこの反論はしかしながら、カーク (Kirk, G.S.) も言っているように、^④ 説得力を持っていない。カークはこの動詞がしばしば *specify as, identify as* を意味することを指摘している。*νομίσας* はしばしば (*εἶναι* を伴って) *nennen* を意味するのであって、例えば *σοφιστῶν νομίσαντες τὸ ἀνόρα εἶναι*. (Platon, *Prot.* 311e) などに用いられ、その意味は *Einen Sophisten nennen*

sie den Mann. (Schlemacher 訳) である。

バーネットの読みの主要な点は、先にも述べたように、*τὸ ὑποκείμενον* を the substratum of the opposites としたところにあるであろう。バーネットの読みを検討するならば、この点にご注目すべきである⁹と思われる。

アリストテレスの『自然学』(A. 4, 187 a 13)において、アリストテレスが *τὸ ὑποκείμενον* という語を用いて語っている箇所に注釈を行いつつシンプリキオスは、一なる物體的なものとして、即ち *τὸ ὑποκείμενον* として、タレスの水を語っている¹⁰。シンプリキオスはアナクシマンドロスを語る前に、タレスの水を基体として語っているのである。このことは一見、バーネットの *τὸ ὑποκείμενον* = the substratum of the opposites という理解を否認するかの如くである。しかし事實はそうではないと思われる。アリストテレスは『自然学』(A. 4, 187 a 12 ff.)において、自然学者たちの観方には二通りある、と言っている。即ち、(1) 或る自然学者たちは基体である物体の一つであるとし、火とか空気とか水とかのうちのどれか一つを基体として、他の多くのものらはこの一である基体の濃密化や稀薄化によって生成する、と考えているのである。即ち、これは或る一つのきまった性質のものを基体として、そのものの量差

(濃密化と稀薄化)によって万物が生成するという考え方である。タレスやアナクシメネスはこの種の考え方の人である。しかるに、(2) 他の自然学者たちの方は、一つのものから「そのうちに」内在する反対なものらが分離する (*ἐκ τοῦ ἐνὸς εὐρύας τὰς ἐναντιότητας ἐκρυσθαι*) という考えで、例えばアナクシマンドロスがそのような考え方である、と。

アリストテレスが右の如く自然学者たちの二通りの考え方を挙げているのに関連して、特に後者の考え方に關して、シンプリキオスは『自然学注釈』(B. 150, 28—29)において、その考え方は分離によって万物の生成を説くもので、もはや従来の考え方ではないとして、次の如く述べたのである。

「基体、即ち限らない物体のなかに、反対なものらが内在するのであって、それらが分離するのである、とアナクシマンドロスは言っているのである。初めてかれ自らこの基体をアルケーと名づけて。ところで反対なものらとは熱冷乾湿などであるが」と。

シンプリキオスがここで基体 (*τὸ ὑποκείμενον*) と言っているのは、性質的に反対のものら、即ち、熱冷乾湿などを内含した無規定的な一者であって、それはもはやアリスト

テレスの言う第一の自然学者たちの考え方は全く異った別な限りなき自然 (*ἕρετα τῶς φύσιν ἕρετος*, *Simplik., Phys. p. 24, 17*)であり、第二の考え方のなかに初めて登場する新しい基体なのである。そういう新しい基体であるということにシンプリキオスの文章のアクセントはあるのだと考えられる。従って、バーネットが *τὸ βροσέμενον* をここで特に限定して *the substratum of the opposites* としたことは肯定さるべきことであると思われる。

それ故、第二に挙げたこの証言も「アナクシマンドロス はアルケーという語を最初に用いた」という読み方の保証にはなり得ないものであることが明らかになった、と言ってよいであろう。

(iv) *Simplikios, De Caelo, p. 615, 15: ἀρχὴν οὗς πρῶτος (Anaximandros) ὁρᾷ*. 「アナクシマンドロスは最初にアペイロンを前提した」。

この文章はバーネットの見解を支えるものだと思う。

以上のように見てくるとき、わたくしたちは *ἀρχή* という語の最初の使用をアナクシマンドロスに帰することに、バーネット説に従ってそれを否定する場合によりももっと強いためらいを感じざるを得ないであろう。むしろわ

たくしたちは、バーネットの言っているように、^⑤ このアルケーの語は全くアリストテレス的と考える方がよりよいのではないであろうか。テオプラストやシンプリキオスらその後の著作家たちはアリストテレスを踏襲しているのである。プラトンにはこの語のそういう使用は見られないのである。

A・ルンベ (A. Lumpe) は *ἀρχή* の語義の歴史的展開を考察した論文^⑥において、イエーガーに従って、この語がアナクシマンドロスによって用いられたことを前提し、アルケーの語義はそこではなお基本的に「時間的な始め」を意味するけれども、この語は「よって一切のものが始まるものもの」に対して *metonymisch* [換喩的] に用いられている、と言う。従ってこの語は未だ *デ・イールス* が考えていた如き術語的使用のものではない。むしろ、後にアリストテレスによってこの語に与えられた *principium reale* という意味における使用への *Ansatz* が、アナクシマンドロスにおいて見られる、とルンベは言うのである。ルンベはアルケーの語をアリストテレスの意味への展開として捉えている。ルンベの考察は *Metonymie* という考えを用いて一見説得的であるけれども、その論拠となる資料の取扱いは、専らイエーガーに依っているのである。翻って考

えてみると、ルンペの考察は、この語をアリストテレス的使用の内部で意味づけ、それをあたかもアナクシマンドロスのものであるかの如く、かれに帰しているにすぎないかも知れないのである。

アナクシマンドロスがト・アペイロンについて語ったということを否定すべき理由はないであろう。しかしかれがそのものをアルケーという語を以って規定したということには、大いに問題があると言わなければならない。

四

シンプリキオスは、自分の文章の中にアナクシマンドロスの言葉が直接引用されているということを、「そういうふうにはやや詩的な言辞でそれらのものを語って」という表現で示しているのだと思われる。そこで、アナクシマンドロスの言葉がその中に含まれていると思われるシンプリキオスの文章の構成を見ると、それは λέγει「かれは言っている」という語で始まり、λέγων「語って」という現在分詞で終わっていることに気づく。即ち、この文章は、「かれは言っている……を語って。」という構成になっていて、「語る」という意味の言葉が二重に用いられている文章なのである。ギリシャ語の文章にはそういうふうに λέγει…

λέγων. というような言表の仕方がまま見られるようである。例えば、わたくしたちはプラトンの文章のなから次のような用例を見出すことが出来るのである。

ἐπεικὴ ἂν μοι δοκῇ πρὸς τοῦτον λέγειν λέγων ὅτι

… (Apol. 34d.)

「わたしはその人に対して……と語ればもっともなことを語ることになるでしょう」。

πολύς τί ποτε ἄρα λέγωντες παρὰ τὰ πύρρα κινεῖσθαι.

(Theait. 181 c)

「人々が万物は運動すると語るとき、一体なにをかれらは語っている(意味している)のかということ」。

右の二つの用例からも察せられるように、文章が λέγει (φασι) … λέγων の構文である場合には、分詞 λέγων によって導かれる言葉は話者 [λέγει の主語] が直接語る言葉であり、主動詞 λέγει によって導かれる内容は、先の語られた言葉の解釈「意味」なり評価なりである。そしてその解釈や評価は、λέγει の主語となる人が自分で行うものであったり、または、その人が λέγει 以下で何を意味したかを、別の人であるその文章の筆者が行うものであったりするものである。また、例えばヘロドトス (Herodot. III, 156, V, 36, 49) などに見られる εἰρη λέγων「かれは語って言っ

た」という pleonasm (冗語法) は先のプラトンからの用例で見た場合の一種の変形とも考えられよう。直接引用される言葉の意味が誰れにとっても明瞭である場合には、それに解説が加えられる必要がないので、その場合には、*ἐὼν λέγων* は単に一種の強調的な、修辭的な言葉の積み重ねになってしまっている、と思われるからである。或はまた次のような文章もある。

τί ὃν λέγουρες ἀεβάζουσι ἀαβάζουσας; (Plat. Apol., 196)

「中傷する人々は一体何を語って中傷していたのですか」。

右の用例では「語る」(*λέγουρες*)は「中傷する」(*ἀεβάζου*)という語によって規定され、より明確化されていると思われる。^⑧

さて、わたくしたちにいま問題となっているシンプリキオスの文章においては、直接伝達さるべきアナクシマンドロスの言葉は、「そういうふうにやや詩的な言辞でそれらのものを語って (*αὐτὰ λέγων*)」という表現によって、指し示されているのである。他方 *λέγει* という動詞によって語られる内容は、アナクシマンドロスの言葉の意味について述べられているものであって、直接的伝達ではないであろう。それは報告者「テオプラストス」のものである。で

は *αὐτὰ λέγων* の *αὐτὰ* 「それらのもの」という中性複数の代名詞は何を指しているであろうか。それはまず、内容的には、中性複数の名詞 *στοιχεῖα* 「元素」を指しているであろう。しかしその *αὐτὰ* が直接明瞭に指しているのは、そのすぐ先にある語句、*διόθεν γὰρ αὐτὰ δίκην* 「それらのものは罰を受ける」の *αὐτὰ* である。そしてまたこの *αὐτὰ* は *τοῖς ὄσιν* を指すかとも考えられるが、カーン (Kahn, C.H.) がアリストテレス (*Mel.* 1014a27) を参照しつつ言っているように^⑨、どちらかと言えど、*ἐξ ὧν, εἰς ταῦτα* の中性複数代名詞を指していると思われる。しかしこれらの代名詞と名詞 *στοιχεῖα* との一致は自明のもではなく、その一致は、*ὅγλον δὲ ἔτι* … 「明らかに」以下のシンプリキオスに帰せられる説明の文章を見て、初めてわかることなのである。従って、そういう文章上の飛躍の如きものを考慮するとき、*αὐτὰ λέγων* が直接的に指し得る箇所は、一応 *ἐξ ὧν* 以下より *ταῦτα* の語までということになるであろう。そこで、*λέγει* に始まり *λέγων* に終る文章を *ἐξ ὧν* を境に分けてみるとどうであろうか。この場合、*ἐξ ὧν* 以下は諸元素間の相互生成がテーマであり、その前の文章ではト・アペイロンからの天や宇宙らの生成がテーマであるから、後半の文章内容についての解釈、説

明が $\epsilon\zeta\ \omega\upsilon$ 以前の文章であるとするには出来ないのである。そこで、 $\epsilon\zeta\ \omega\upsilon$ 以下 $\tau\acute{\alpha}\varsigma\epsilon\upsilon$ までの文章をよく見てみると、

$\epsilon\zeta\ \omega\upsilon$ $\theta\epsilon\ \eta\ \tau\epsilon\upsilon\epsilon\alpha\varsigma\ \epsilon\sigma\tau\iota\ \tau\omega\varsigma\ \omega\upsilon\sigma\iota$, $\kappa\alpha\iota\ \tau\eta\upsilon\ \phi\theta\alpha\rho\alpha\upsilon$
 $\epsilon\iota\varsigma\ \tau\alpha\upsilon\tau\alpha\ \tau\eta\varsigma\omega\theta\alpha\upsilon\ \kappa\alpha\tau\grave{\alpha}\ \tau\omega\ \chi\eta\sigma\omega\upsilon$,

「[有るものらにとって生成がそれらからであるところのものら、そのものらへと正当に従って消滅もまた生成する]」

という文章は

$\theta\iota\omega\theta\alpha\upsilon\ \chi\eta\sigma\omega\upsilon\ \alpha\upsilon\tau\grave{\alpha}\ \delta\iota\epsilon\tau\eta\upsilon\ \kappa\alpha\iota\ \tau\iota\sigma\iota\upsilon\ \alpha\lambda\lambda\eta\lambda\omega\iota\varsigma\ \tau\eta\varsigma$
 $\alpha\upsilon\tau\iota\alpha\varsigma\ \kappa\alpha\tau\grave{\alpha}\ \tau\eta\upsilon\ \tau\omega\ \chi\eta\sigma\omega\upsilon\ \tau\acute{\alpha}\varsigma\epsilon\upsilon$,

「[なぜならそれらのものは時の定めに従って相互に不正の罰を受けまた償いをなすゆえ]」

という後の文章と、或る仕方で、パラレルであり、また前の文章は後の文章の意味を、特に生成 ($\tau\epsilon\upsilon\epsilon\alpha\varsigma$) という観点から、解釈したものである、と思われるのである。しかも、後の文章の表現は「詩的な言辞」と言われるのに最もふさわしいであろう。従って、 $\chi\epsilon\gamma\epsilon\alpha\cdots\chi\epsilon\gamma\omega\upsilon$ の文章構造に着目しつつ探し求めてきたアナクシマンドロスの言葉を、わたくしたちは、一応、右に挙げた後者の断章に限定して考えることが出来るのではないであろうか。即ち、 $\theta\iota\omega\theta\alpha\upsilon$ から $\tau\acute{\alpha}\varsigma\epsilon\upsilon$ までを一応アナクシマンドロス自身の

言葉である、と。

五

ところで、 $\epsilon\zeta\ \omega\upsilon$ 以下 $\tau\eta\varsigma\omega\theta\alpha\upsilon$ までを断片からはよく考えは、バーネット^⑤、デイルマイヤー (Dirlmeier, F.)^⑥、カーク (Kirk, G. S.)^⑦ らのすでに主張する所である。それに対して、その箇所をも断片に入れるべきだとするのは、デイルス、クランツを始め、コーンフォード (Cornford, F. M.)^⑧ のである。またカーン (Kahn, G.)^⑨ は、この箇所をテオプラストスによる paraphrase とするか、或は忠実な引用とするかを天秤にかけるとすれば、自分は後者の見解に傾くと思う、と言っている。コーンフォードによれば、テオプラストスは非常に簡潔な文体を用いる人であるから、普通ならば $\tau\eta\varsigma\omega\theta\alpha\upsilon\ \tau\grave{\alpha}\ \theta\upsilon\tau\alpha$ と書けば済むところを、わざわざ $\eta\ \tau\epsilon\upsilon\epsilon\alpha\varsigma\ \epsilon\sigma\tau\iota\ \tau\omega\varsigma\ \omega\upsilon\sigma\iota$ と書くようなこと、また $\phi\theta\epsilon\iota\sigma\theta\alpha\upsilon$ と書けばよいはずのところを $\phi\theta\alpha\rho\alpha\upsilon\ \tau\eta\varsigma\omega\theta\alpha\upsilon$ と書くようなことはないであろう、という。しかしこの箇所は、 $\theta\iota\omega\theta\alpha\upsilon$ 以下 $\tau\acute{\alpha}\varsigma\epsilon\upsilon$ までの最も確実に断片と考えられる詩的言辞を、生成の観点に立って、直接バラフレーズする唯一の文章なのである。そこでは、「有るものらが生成する」というように $\tau\grave{\alpha}\ \theta\upsilon\tau\alpha$ 「有るものら」

が主語にならないで生成 (*réseais*) が主語になっているのは、本稿第二章に引用したシンプリキオスの文章全体から理解されるように、全体を貫く問題が「生成」であるからであり、その観点に立つてパラフレーズが行われているからであると思われる。また単に「消滅する」(*phéipeōn*) とされず、「消滅もまた生成する」(*kai tū phōpōn réseōn*) と書かれているのは右と同じ理由によるのであろう。消滅と言っても、アナクシマンドロスの考えによれば、それは相互生成の一環に他ならないことが、明瞭に説かれているのであると思われる。他方また、カーンの言っているように、この章句には *rhythmic balance* があって、この文章の *style* そのものがこの章句を断片として考えるよう要求するかも知れない。しかしなお、*réseais* 並びに *phōpōn* を紀元前六世紀において術語的、プラトンの意味を有した語であったと考えることには、バーネットが注意している如く、無理があると思われる。ディールマイヤーはバーネットのこの意見に賛成し、これらの語は個々には、例えば *réseais* はホメロスに、*phōpōn* はアイスキュロス、ヘロドトスなどに用いられた、古い言葉であるけれども、*réseais-phōpōn* を一対の用語として考えることが出来るのはプラトンやアリストテレスにおいてである、と言

っている。また、ヴラストス (*Vlastos, G.*) は特に *phōpōn* の語が疑わしいと考え、この語について調査した結果、ソクラテス以前の哲学者たちのいかなる断片のなかにもこの語が抽象名詞としては用いられていない (デモクリトスの断片、DK. 68 B 249 に見られるこの語は明らかに別な意味である)、と言っている。また、パルメニデスは、イオニアの哲学者たちへのポレミクにおいて、これらの用語法を反映しているけれども、そのパルメニデスが「消滅」を意味する語として用いているのは *ōlēōs* (そして動詞は *ōlēōn*) である、とヴラストスは注意している。従って、*réseais* や *phōpōn* の語が用いられているこの部分はアナクシマンドロスの言葉についての後世の解釈——特に *réseais* を問題としながら行われた解釈——と考えらるべきであろう。やはりこの部分を断片に入れないほうがより確かであろうと思われる。

次に *kai tū phōpōn* 「正当に従って」と *kai tū toū phōpōn tēsai* 「時の定めに従って」との二つの語句について、わたくしたちは考えてみなければならぬであろう。というのも、*kai tū phōpōn* の語句を断片として、バーネット、ディールマイヤー及びヴラストスらは認めているからであり、また他方、*kai tū toū phōpōn tēsai* をディ

3. 16) において、「正義」(Δίκη)と「時」とを結びつけて語っているのである。時は正義として行い、真実をもたらすというのがソロンの考えであり、これはアナクシマンドロスにより、まもなく再び意義深くとりあげられた思想である、とフレンケルは言っている。以上の如く見てくるとき、わたくしたちは $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\eta\upsilon\ \tau\omicron\upsilon\varsigma\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon\ \tau\acute{\alpha}\xi\epsilon\iota\nu$ の語句を断片に入れるよう考える方がより自然であると思わざるを得ないのである。この語句が $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ のパラフレーズであると解することは、すでに $\chi\epsilon\iota\mu\epsilon\iota\colon\chi\epsilon\iota\omega\upsilon$ の構文に注目しつつ述べたように、断片とその解釈とを逆に考えることであって、認め難いと思われる。むしろその文章上の位置から見て、 $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ の方がそパラフレーズであらう。

ところで、この $\chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ という語は、ラクレイトス (DK. 22 B 80) やパルメニデス (DK. 28 B 2, 8) の断片中にも見られるものであり、初期の哲学者たちによってすでに早くから用いられている語である。さて、この語 $\chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ の意味は盲目的 (sinntfrei) な強制としての「必然」(ἀνάγκη)とは異なる。 $\chi\rho\eta\text{-}$ 幹の諸語の一つとして、 $\chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ は Sollen, Schuldig sein, Gebrauchen, Brauchbar sein を意味するものである^⑧。従って、 $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ は nach der Billig-

keit (Schliermacher)^⑨とか、Wie es in der Ordnung ist (Frankel)とか、as is meet (Burnet)とか、nach der Schuldigkeit (Kranz)と訳されるのである。因にまた $\chi\rho\eta$ の語については、最近次のような興味ある報告がなされている^⑩。即ち、 $\chi\rho\eta$ は subjective であり、それに似た意味の語 $\delta\epsilon\iota$ は objective である、と。従って前者は self-interest の要素を含み、それに対して後者は νόμος (law, decree) に近いのであり、 $\chi\rho\eta$ によっては、人は或る事柄を当然(義務として)能動的になさねばならないということが表現され、 $\delta\epsilon\iota$ によっては、受動的に従うべきことが表現される、と。また、 $\omega\varsigma\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ は単なる必然の否定ではなく、ツキディデス (Thucyd. III, XI, 4) にもその例が見られるように、不当 (not right) を意味するのである。右の如き注意によって、わたくしたちは $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ の意味するところが単なる必然性の主張にあるのではなく、proper necessity のである、と、その文章上の modality は necessity と persuasion とが離れ難く一体になった性格のものであらうことを知ることが出来る。従って、 $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon$ はアナクシマンドロスの断片のなかのただこれと平行的な語句 $\kappa\alpha\tau\alpha\ \tau\eta\upsilon\ \tau\omicron\upsilon\varsigma\ \chi\rho\omicron\nu\sigma\upsilon\ \tau\acute{\alpha}\xi\epsilon\iota\nu$ の単なる言い換えに終るものではなく、「それらのものは

相互に不正の罰を受け、また償をなす」というきわめて人倫的な命題のニュアンスをもまた同時に含み得ているのであろう。そのような語 *νομος* は人倫的命題を自然学的命題へと、きわめて適切に解釈し移しゆくために巧みに用いられた語である、と思われるのである。*νομος* の語は初期の哲学者らによって用いられた古い言葉であることは先に述べた。この語は、或は、アナクシマンドロスによっても用いられたかも知れない。それを否定する理由はどこにもない。しかしそういう語を巧みに用いることによって、アナクシマンドロスの人倫的命題を自然学的命題へと、アナクシマンドロスの宇宙論的思維の概要にそって、解釈し、移行こうとしたのはテオプラストスであったであろうか。

以上のような考察から、わたくしたちは、一つの試みとして、アナクシマンドロス自身の言葉と考えてよいと思われる断片を次のように限定してみることが出来るのではないであろうか。

διόβαι γὰρ ἀνὰ δίκην καὶ τίαν ἀλλήλους τῆς αἰκίας κατὰ τὴν τοῦ νόμου τάξιν.

「なぜならそれらのものは時の定めに従って相互に不正の罰を受けまた償をなすのであるから」。

六

試みに取り出した右の断片は何を語るものであろうか。

翻訳では明瞭ではないが、原文は能動の文章である。「不正の故に、時の定めに従って、相互に正義と償いとを与え合う」というのが、おおよその、断章の直接の表現である。「正義を与える」(*dikn dióbaui*)という能動のギリシヤ語熟語は翻訳において、「罰を受ける」という、あたかも受動的であるかの如き表現をとっているだけであり、*τίαν dióbaui* も同じである。断片はそういう能動的表現によって言表されている一つの人倫的命題である。この断片が自然学的生成の命題へと翻訳され、パラフレーズされたとき、能動の叙法的性格を持つ語 *νομός* 「正当」が用いられたのは全く適わしいことであったと思われる。

ところで、時の定めに従って相互に正義を与え合うと言われる場合、その「正義」とは何であろうか。周知の如くホメロスにおいてはディケーは未だ道德的正義ではなかった。例えば、『オデュッセイア』(IV. 691)における *dikē* は「やり口」(way, customary behaviour)の意味であり、同書(XXIV. 255)の *dikē* は「老人の」manner とか特権(right)の意味に用いられているのである。そのようにホ

メロスにおいてはディケーは『イリアス』(XVI, 388)では Justice の意味にも用いられてはいるけれども、一般には、ガスリーの言葉を借りれば次のように言われるであろう。^⑤ On the whole however the *dike* of the gods contained as yet no necessary implication of moral righteousness: it was simply the way they chose to behave. しかしこのディケー語義は、ホメロスの背景をなす王制(神授の)の没落と共に当然変らざるを得なかった。「始めからすべての人はホメロスより学んだ」(クセノパネス)ことへの反省が当然起らざるを得なかったのである。ボイオテイアの貧しい農民の子に生れた詩人ヘシオドスの語るディケーは、いわば、弱者の強者に対する権利としての正義である。『仕事と日々』において、「他処者^{よそ}らにも土地の者らにも真すぐな正義を与える「公正な裁判をする」人々、そして正義の道からはずれない人々、その人々にはポリスは榮え民らはそこで花開く」(235—227)、「おお王らよ、汝ら自らもまたこの正義を熟慮せよ」(238)とこの詩人は歌うのである。すでにヘシオドスにおいて、ディケーの名の許に「等しき権利」が要求されているのである。また、アテナイの同朋に「善き法の支配する秩序」(εὖνομία)を説くソロンもまたディケーについてかく語っ

ている。「ディケーは無言のうちに今の有様や以前のことも知っていて、時とともに必ず報いを求めてやって来る」、^⑥と。そのディケーの顯現についてソロンは、「短い時がわたしの狂気をたしかに人々に示すであらう。示すであらう、中央に(ἐν μέσῳ) 真実がやって来て」と歌っている。ヒルツェル(Hirzel, R.)は次の如く述べている。「従って裁判官の積極的な主要課題は諸党派の争いにおいて真の言表を認識すること、及びこのものを判決において自分のものとするにあらるのであった。——真の言表、即ち本来の意味における真なるもの τὸ ἀληθές というのは、それは実に語源的にはおおわれざるもの (das nicht Verborgene)、自らの内容を公表しているもののである」と。アレテイアと姉妹であるディケーはひたすら真実を見ようとする。そしてディケーは、それ故、やがて冷酷の性格を持つに至る。^⑦ディケーはエリニウス〔復讐の女神〕とのみならず、また死の力とも等しくなる。アイスキュロスの悲劇『供養する女たち』(306—314)におけるコロスの「おお偉大な運命らよ」に始まる舞歌はかかるディケーの終極の相を示している。ῥάναυτα καθέν.「殺った者はやられる」。ともあれディケーが時と共に来って行く要求は、相争う両党にとって中央に真実が来、真実が公

平、平等に白日のもとに顯われることである。*dian* は *deiknujue* (示す) に由来する。かかるディケーの要求がポリスの政治思想の上で実現をみたのは紀元前六世紀の中頃からであると考えられる。エウノミアから発展した *isonomia* [「法的平等」] の思想がそれであろう。紀元前六世紀の中頃、サモス島の僭主ポリュクラテスの死後、その王笏と全権能とを委託されていたマイアンドリオスは、全市民の民会を召集して次の如く言ったと伝えられている。「……わたしはポリュクラテスがかれ自身に等しい人々を支配したのに不満であったし、誰れであれ他の者がそんなことをするのに。さて、ポリュクラテスは今や自らの運命を完了したので、わたしは主権を中央に (*es megon*) 置き、あなたがたにイソノミアを宣言する」と。「中央に」とはどういう意味であろうか。それはタレスからペレキュデス宛の書簡 (Diog. Laert. I, 43—44) をみると、「公共のなかに」 (*es to koinon*) のことであることが察せられるであろう。

アナクシマンドロスの思维の背後には、なにかこのような、ポリスの政治思想の背景が考えられるのではないであろうか。ヴラストスはアナクシマンドロスの self-regulative equilibrium と²⁷言うべき自然観に言及しつつ、In Anaximander we can trace it back to its source in

the political assumption that justice was an affair between equals and that its settlement involved an equation of compensation to injury. と言っている。²⁸

ところで、アナクシマンドロスの断片の叙法的性格が全て能動であることをわたくしたちは先に注意した。イソノミアにおける等しき権利「力」の要求はディケーの実現である。そして、権利「力」は本来他から与えられるものではなく、ポリスの構成要素たる個人個人が本来等しくそれであるところのものであろう。正義として時はただ自ずとその真実を顯わすだけである。従って、「相互に正義を与え合う」という能動の表現のなかに、わたくしたちは、国家構成の元素としての個人が、他に強制されてではなく、自然に、自動的に、自己実現として国家にかかわる仕方のギリシャ的表現を見ることが出来るのではないであろうか。それはきわめて特異なことであると思われる。ブッチャー (Butcher, S. H.) は言っている。²⁹「ギリシャの一般意識にとっては、国家或は都市は組織ではなく有機体であった。生命のない統治機関ではなく、市民にのしかかる異質の力でもなく、あらゆる個人の意志を自らの内に包摂する生きた全体、自発の活力を阻みもせず個人の成長を挫きもせず、その包容する個性を豊富にしました完全にして

ゆく全体であつた」。「相互に正義を与え合う」とは中央に、公共のなかに主権が置かれ、誰れか一人がそれを占有してしまわないことであり、各人が互に権利「力」としての自己を実現し合うことである。個体相互の力のかかる均衡が正義であるように、時の相下にある一切の有るものらにとつても正義は個物相互の力の均衡である。

イソノミアの自然学的表現は、ヴラストスによつて指摘されているように、アルクマイオンの医学思想に端的に見られる。アルクマイオンは言う。「健康を保持するものは湿乾冷温辛甘などの諸々の力のイソノミアである。他方それらのものにおけるモナルキアー「独裁」は病氣を作るものである」(DK. 24 B 4)⁷。

アルクマイオンのかかる自然学的考察はアナクシマン드로スの self-regulative equilibrium としてのそれがあつてはじめて可能となつたのではないであらうか。アナクシマン드로スの自然研究(περὶ φύσεως ἱστορίαι)の視点は、かれの言葉と考えられる先の断片にあつたように、やや詩的な言辞で表現されていると言ふことができるのではないであらうか。かれは幾何学的平等と均斉とによつて宇宙像を画いたと伝えられるが、それは諸宇宙間のイソノミアの表現であり、ディケーの思想はここにもあらかじめ予想され

なければならぬ。アナクシマン드로スにおいては、人倫的世界の原理は自然的世界の原理に先立ち、しかもそれと共通である。断片における「なぜなら」(ὅτι)の語はその証言である。

アナクシマン드로スによつて始めて書かれ、ミレトスのヘカタイオスによつて修正された世界最初の地図もまた人倫的世界の原理が先であり、しかもその原理は自然的世界のそれと共通であることを物語っている。地理学者アガテメロスと言っている。「さて古人たちは人の住む大地を円く描いた。ヘラスをまん中におき、そしてデルポイをヘラスの中心にして、というのもヘラスは大地の臍を持つているから⁸」と。この地図では大地は「デルポイを中心にして」まるでコンパスによるかのように円く描かれ、その周囲をオケアノスが流れている、そしてアジアをヨーロッパに等しくしている。とヘロドトス(Hdt. IV, 36)は報告している。アナクシマン드로スは地図を制作するにあつて、ポリスの精神的原理をそのまま地図の上に表現しているのであらう。当時全ギリシヤにあつて独立的な多くの都市を導く者はデルポイの神であつた。そのアポロンの名は、アナクシマン드로スがその建設指導者(οὐκιστής)であつた植民都市の名にも用いられたのであつた。

アナクシマンドロスによって構想された宇宙像の基礎をなす幾何学的平等、諸々の力の均衡の思想は単なる知的・技術的達成ではなく、それを可能ならしめた一つの視点、一つの母胎として、背後にディケーの思想をわたくしたちは予想しなければならぬであろう。アナクシマンドロスの言葉と考えるにふさわしい、先にとり出された一つの短い断章は、恐らく、アナクシマンドロスの宇宙論的思惟の概要をなすものであったと思われるのである。

(本学講師、哲学)

注

- ① アポロドロス(前二世紀)の『年代記』(*Chronica*)にみえ、Diogenes Laertius II, 1 の報告。DK. 12 A 1.
- ② DK. 12 A 3.
- ③ DK. 12 A 1, 6.
- ④ DK. 12 A 1.
- ⑤ DK. 12 A 1. ただし Diog. L. の報告ではアナクシメンが、Zeno の最初の発明者となつてゐるが、Herod. II 109 の記述を参照すれば、Diog. L. の報告には信頼性がなつてゐる。むしろ Suidas (DK. 12 A 2) の記述の如くアナクシマンドロスはZeno を導入した、と考えざるを得ない。古代の時計については Diels (H. Diels)『古代技術』(*Antike Technik* 1924) (邦訳、平田寛訳、昭和一八年、四十五年)の第七講参照。バビロニアの時計「半球」はギリシヤで改良され天球儀に

なつた、と言われる。

- ⑥ Diels, H.: Anaximandros von Milet, 1923 [*Kleine Schriften zur Geschichte der antiken Philosophie*, 1969 所収] S. 2—3.
- ⑦ DK. 12 A 2 にみられるシメオスの記述、並びに DK. 12 A 1 の Diog. L. の記述を参照。
- ⑧ Simplicius: *Phys.* p. 24, 20.
- ⑨ 注⑦参照。
- ⑩ 古代ギリシヤにおいて、書物が人々の手に普及するようになった時期は、およそ前六世紀から前五世紀への転回期乃至は、もう少し遡つて考えることも出来る、と言われるが、(Lesly, A.: *Geschichte der griechischen Literatur*, 1963, S. 16 並びに Artemis 版 *Lexikon der alten Welt*, 1965, S. 462) しかし、詩にせよ、他の文芸作品にせよ、それらが書物として書かれたものになつてから、長い間発表の普通の仕方、口頭によるものゝあつた。書物は、そのための「記憶え」(メモメモ)であつた、という事情をこの際考え併せてみるべき。The Oxford Classical Dictionary, second edition, p. 173 参照。
- ⑪ Gigon, O.: *Der Ursprung der griechischen Philosophie*, 1967, S. 44 並びに Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy* I, 1962, pp. 72, 73 を参照。
- ⑫ Simplicius: *Phys.* p. 24, 13—25.
- ⑬ Diels, H.: *Kleine Schriften*, S. 3.
- ⑭ Diels: op. cit. S. 4.
- ⑮ Diels-Kranz: *Fragmente der Vorsokratiker* I, S. 89 の脚注、並びに Fränkel: *Wege und Formen frühgriech-*

chischen Denkens, 1955, S. 188 参考註⁹⁰

⁹¹ Burnet, J.: *Early Greek Philosophy*, p. 54 参考註⁹⁰

⁹² Jaeger, W.: *Die Theologie der frühen griechischen Denker*, 1953, S. 231, (Eng. ed. *Theology of the early Greek Philosophers*, 1947, p. 201).

⁹³ τὰς ἀρχαίαις (McDiarmid, J.B.) 参考註⁹⁰ Theophrastus on the Presocratic causes (*Studies in Presocratic Philosophy*, Vol. 1, ed. by Furley and Allen 1970, 前文) p. 188 ff. 参考註⁹⁰

⁹⁴ McDiarmid: op. cit. p. 188.

⁹⁵ Jaeger: op. cit. S. 231.

⁹⁶ Burnet: op. cit. p. 54.

⁹⁷ Burnet: op. cit. p. 54 and p. 36.

⁹⁸ Burnet: op. cit. p. 55.

⁹⁹ Kirk, G. S.: Some problems in Anaximander, 1955 (*Studies in Presocratic Philosophy*, vol. 1, ed. by Furley and Allen 1970) p. 326.

¹⁰⁰ Simplic: *Phys.* p. 149, 5—7.

¹⁰¹ Burnet: op. cit. p. 11.

¹⁰² Lumpe, A.: Der Terminus „Prinzip“ (*ἀρχή*) von den Vorsokratikern bis auf Aristoteles (*Archiv für Begriffsgeschichte*, Band I, 1955) S. 104 ff.

¹⁰³ Passow 参考註⁹⁰ 希腊辞典策1 前策1 卷三〇の說明を参考された。

¹⁰⁴ Kahn, C. H.: *Anaximander and the Origins of Greek Cosmology*, 1960/64, p. 167.

¹⁰⁵ Hölscher, U.: *Anfängliches Fragen*, 1968, S. 11.

¹⁰⁶ Burnet: op. cit. p. 52.

¹⁰⁷ Dirlmeier, F.: Der Satz des Anaximandros von Milet (Vs 12 B 1) 1938 (*Um die Begriffswelt der Vorsokratiker*, hrsg. von, Hans-Georg Gadamer, 1968) S. 88 ff.

¹⁰⁸ Kirk, G. S.: *The presocratic philosophers*, 1960, pp. 117—8. Some problems in Anaximander, 1955 (in *Studies in Presocratic Philosophy*, vol. 1, ed. by Furley and Allen) p. 340 ff.

¹⁰⁹ Guthrie, W. K. C.: *A History of Greek Philosophy*, 1, 1962, p. 77. Kahn: op. cit. pp. 177—178.

¹¹⁰ Kahn: op. cit. p. 173.

¹¹¹ Kahn: op. cit. p. 173.

¹¹² Burnet: op. cit. p. 52.

¹¹³ Dirlmeier: op. cit. S. 89.

¹¹⁴ Vlastos, G.: Equality and Justice in early Greek Cosmologies, 1947 (in *Studies in Presocratic Philosophy* vol. 1.) p. 73.

¹¹⁵ Dirlmeier: op. cit. S. 92—93.

¹¹⁶ Hölscher: op. cit. S. 27. (1) 参考註⁹⁰ 前策1 Anaximander and the beginnings of Greek Philosophy 参考註⁹⁰ 参考註⁹⁰ Furley and Allen 参考註⁹⁰ *Studies in Presocratic Philosophy*, vol. 1, p. 281 参考註⁹⁰ 参考註⁹⁰

¹¹⁷ McDiarmid: op. cit. p. 194.

¹¹⁸ Kirk: Some problems in Anaximander, p. 345.

¹¹⁹ Fränkel: op. cit. S. 188.

¹²⁰ Diels: op. cit. S. 4.

¹²¹ Fränkel: Die Zeitauffassung in der frühgriechischen

Literatur (in *Wege und Formen frühgriechischen Denkens*). S. 9.

④⑦ Fränkel : *Parmenidesstudien*. S. 188.

④⑧ Schleiermacher : *Über Anaximandros*. 1811 (Schleiermacher's *Sämtliche Werke*. III, 2. 1838). S. 186.

④⑨ Mourcelatos, A.P.D. : *The Route of Parmenides*. 1970, p. 277.

④⑩ Guthrie, W. K. C. : *The Greeks and their Gods*. 1950, p. 143.

④⑪ Solon : *Eleg.* 4

④⑫ Solon : *Eleg.* 11

④⑬ Hirzel, R. : *Themis, Dike und Verwandtes*. 1907, S. 108.

④⑭ Hirzel, R. : op. cit. S. 147.

④⑮ Sinclair, T. A. : *A History of Greek Political Thought*. 1961, p. 33.

⑤⑥ Herodotos, III, 142.

⑤⑦ Vlastos, G. : op. cit. pp. 82—83.

⑤⑧ Butcher, S. H. : *Some aspects of greek genius*. 1891, p. 51 (邦訳『ギリシャ精神の様相』田世秀央、和辻哲郎、寿岳文章訳、岩波文庫五一ページ。引用は同書訳文による)。

⑤⑨ Vlastos, G. : op. cit. p. 57 ff.

⑤⑩ Kahn : op. cit. p. 82 参照。

付記

この論文は昭和四十二年度および四十三年度文部省科学研究費補助金による総合研究「ギリシャ思想とインド思想との比較哲学的研究」において筆者が「ギリシャ自然哲学の研究」という研究分担課題を与えられ、三井浩、金松賢、諒両先生の御教示を頂きながら着手した研究の一端である。本稿ではアナクシマンドロスのト・アペイロンについて、またかれの宇宙論については触れることが出来なかった。他日稿を改め考察したい。